

百人一首の英訳から見る「ちはやぶる」表記の変遷

Transitions in the Writing of “Chihayaburu” in English Translations of *Hyakunin Isshu*

Károlyi Orsolya

カーロイ・オルショヤ

要 旨

百人一首の初英訳は 1865 年に、F. V. Dickins 氏によって作られた。Dickins 自身その後、2 回も翻訳を試み、その他も数多くの英訳が作られ、その数はこれまで 20 訳以上に上っている。それらの英訳のほとんどに歌のローマ字翻字も記されており、17 番の在原業平の歌の翻字を調べてみたところ、歌の枕詞「ちはやぶる」が濁音で表記される翻字もあれば、清音で表記されるものもあった。日本における享受史を調べてみたところ、以前「ちはやぶる」を清音で表記する時期もあった。例えば、明治・大正時代のものだと思われるかるたの札を見てみると、ほとんどが清音表記になっている。そこで本稿においては、「ちはやぶる」のローマ字翻字と、英語圏、また日本における享受について検討し、この枕詞を濁音ではなく、清音で表記するべきだと結論付けた。

キーワード：百人一首・枕詞・ちはやぶる・和歌英訳

1. はじめに

翻訳にローマ字が使われている場合、清音と濁音が別々の文字で表記されている。例えば、「ふ」が「fu」と書かれており、「ぶ」が「bu」と書かれている。その反面、日本語の場合、漢字或いは変体仮名で清濁に同じ文字が使われており、濁音は長い間表記されていなかった。そのため、後世の人は文字を見るだけで、清音で発音していたか、濁音で発音していたか、必ずしも確定できない。これは外国人にとっては奇妙

な特徴である。

本稿では、「ちはやぶる」という枕詞が詠みこまれている、在原業平の歌に焦点を当てる。百人一首17番は在原業平の、「ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは」という歌であるが、この歌の中には清濁問題が2つも浮上している。1つは、「くくる」か、「くぐる」かという問題、もう1つは「ちはやぶる」か「ちはやふる」かという問題である。

「くくる」の清濁は意味にも影響するため、今まで注目されてきたようだが¹、後者の「ちはやぶる」はほとんど注目されていなかった。それは、「ちはやふる」であっても、「ちはやぶる」であっても、歌全体の意味に影響がないからであろう。意味が変わらないのであれば、気にすることはないかもしれないが、「ちはやぶる」の語源を今まで説明してきた注釈書の中で、濁音でも、清音でも説明された時期もあった。百人一首が他の言語に翻訳され、ローマ字に翻字されると、翻訳者がどちらの注釈書を参考にしたかによって、ローマ字表記の清濁も変わってくる。そのため複数の翻訳を読む場合、その違いに気づく。

それとは別に、末次由紀著の競技かるたを題材としている漫画、『ちはやふる』が大ヒットしたことで日本人もこの問題に関心を持つようになった。その理由は、題名が清音になっているにもかかわらず、競技かるたの読みでは「ちはやぶる」と濁音で読んでおり、読み札として使われている大石天狗堂の札も濁音になっているからである。末次由紀は自身のツイッターで「ちはやぶるが正しい」と発言したが、この枕詞は清音でも、濁音でも間違っているのではなく、時代によって、前者も後者も流行していた時期があった。本稿においては、英訳のローマ字翻字の変遷と日本の文学史の中での変遷をまとめ、在原業平の歌の場合、清濁のどちらがふさわしいか明確にした。

2. 外国人によって作られた英訳

英訳の場合、百人一首の歌のローマ字翻字がほとんど記されている。その翻字を作った際、何を参考にしたか、原文の出典が不明な訳がたくさんあるが、翻訳者が原文以外の注釈書、または既に存在している翻訳本を、自分の本の序文などに記載している訳もある。ローマ字翻字がそれらに影響されている可能性があるとして、ここではそれぞれの翻訳者が翻字に参考にした可能性があると考えられる出典を全て記すこと

にする。20 訳以上にものぼっている英訳の中には、日本人によって作られた英訳も複数あるが、それをイギリス人、アメリカ人による英訳とは別に扱うこととする。原文の平仮名、またはローマ字表記を翻訳本に書いてある通り記載する。

表 1 「ちはやぶる」の原文表記（外国人訳者）

翻訳者	年	平仮名、ローマ字表記	出典、参考文献
1. F. V. Dickins	1865, 1866, 1898, 1909	1865：原文表記なし、Chi-haya-buru, Chihaya-buru	『百人一首峯梯』、『千載百人一首倭寿』、『百人一首一夕話』
2. Clay MacCauley	1899, 1917	Chihayaburu	Dickins, Chamberlain
3. William Porter	1909	Chi haya furu	Chamberlain, Dickins, McCauley、千載百人一首倭寿
4. Keneth Rexrot	1964	Chihayaburu	不明
5. Tom Galt	1982	Chiha yaburu	不明
6. Howard S. Levy	1984 (1976)	ちはやぶる	井上宗雄、伊藤秀文
7. Steven Carter	1991	Chihayaburu	Tom Galt
8. Joshua S. Mostow	1996	Chihayaburu	おもに有吉保全訳注『百人一首全訳注』（講談社、1983年）と島津忠夫訳注『百人一首』（角川書店、1969年）
9. Peter McMillan	2008	翻訳下の絵には「ちはやふる」とあるが、付録はローマ字でも、ひらがなでも「ちはやぶる」	原文とローマ字表記は島津忠夫訳注『百人一首』（角川書店、1969年）

以上の表 1 には、英訳の「ちはやぶる」のローマ字翻字、それがいない場合は平仮名表記がまとめてある²が、Porter 訳以外は全部濁音になっており、唯一 Porter 訳だけが清音になっている。吉海氏によれば、万葉時代には濁音（破る）と清音（布流）が併存し、平安時代以降は次第に清音に傾いていく。江戸時代にも清音の流行が続き、さらに明治時代の、清濁が表示されている百人一首の札を見ると、清音になっている。図 1 の、明治・大正時代のものだと思われる札を見てみると、全部清音になっている。



図1 明治時代の百人一首の札

しかし、まだ清音が流行していたはずの、1866年に作られた Dickins 訳は濁音になっている。Dickins は翻訳を作る際、何を参考にしたかについて、次のように述べている。

1866年：I have followed the text given in the Hyak Nin Is'-shiu Mine no Kakehashi, or 'steps of the Summit of the Hundred Odes of a Hundred Poets' which has appeared to me to be the fullest and most reliable of all explanatory works on the subject that I have seen, and I have given short accounts of the allusions contained in the Odes, and of the authors of these, taken from the above work.

1909年：The editions I have used are the following：-Hyakunin Isshu miné no kakehashi („Steps to the complete Understanding of the Hundred Poets”), Sensai Hyakunin Isshiu Yamato kotobuki („The Ever-Famous Anthology of the Hundred Poets”) and the chief of all, the Hyakunin Isshu isseki-wa („One evening's talk on the Hyakunin” - i.e. a brief commentary ; the title being a humilific one)³

Dickins は1866年出版の英訳の序文で、「原文は一番信頼できる、精密と思った『百人一首峯梯^{みねのかげはし}』に沿ったものである」と述べ、また1909年出版の訳の序文では「参考文献は：『百人一首峯梯^{せんざい}』、『千載百人一首倭^{やまとことぶき} 寿』、と全ての注釈書の中で一番すぐれた『百人一首一夕話^{ひとよがたり}』である」と述べている。Dickins が最初に参考にした『百人一首峯梯』では「ちはやぶる」と濁音になっており、そのため、Dickins のローマ字翻字も濁音になっているのであろう。ただし、1909年の翻訳では『百人一首一

夕話』も参考にしたとあるが、そこでは清音が使われている。おそらく翻字を変えず、『百人一首一夕話』を歌の解説のためにのみ使用したのであろう。

Dickins に続き、1899年に出版された McCauley 訳も、Dickins と同じく濁音になっている。McCauley は Dickins の訳を参考にしており、その他 Chamberlain の、1877年出版の、「Transactions of the Asiatic Society of Japan」に発表された『On the use of “Pillow-words” and “Plays upon words” in Japanese poetry』³も参考になっている。Chamberlain は百人一首ではなく、和歌の修辞法を研究していたが、その修辞法について書いた記事に「ちはやぶる」も取り入れて、Dickins と同じく濁音で表記している。Chamberlain が書いた記事に賀茂真淵の名前を何回も出しているため、賀茂真淵を参考にしたと考えられる。賀茂真淵の、1757年の『冠辞考』をみると、これにも「ちはやぶる」と、濁音で表記してある。

Porter は 1909年出版の訳の前書きで次のように述べている：

The illustrations have been reproduced from a native edition of the Hyaku-nin-issui, which probably dates from the end of the eighteenth century, and which has been kindly lent to me by Mr. F. V. Dickins.

(挿し絵は 18 世紀末ごろに日本で出版されたと思われる本から再掲しました。この本は F. V. Dickins さんが貸して下さいました。)

翻訳を作った際、Dickins 訳を参考にしてしていると述べているが、ローマ字翻字が Dickins 版と異なっているため、本文のローマ字表記を作る際に、挿し絵を基にしたと推測できる。だが、その挿し絵については「18 世紀末ごろに日本で出版されたと思われる本」としか書かれておらず、その本の題名、または作者が書かれていない。ただし、吉海氏が『「千載百人一首倭寿」の翻刻と解題』⁴で指摘したように、この本は『千載百人一首倭寿』であり、出版年は明確ではないが、天保六年（1835年）以降とされている。

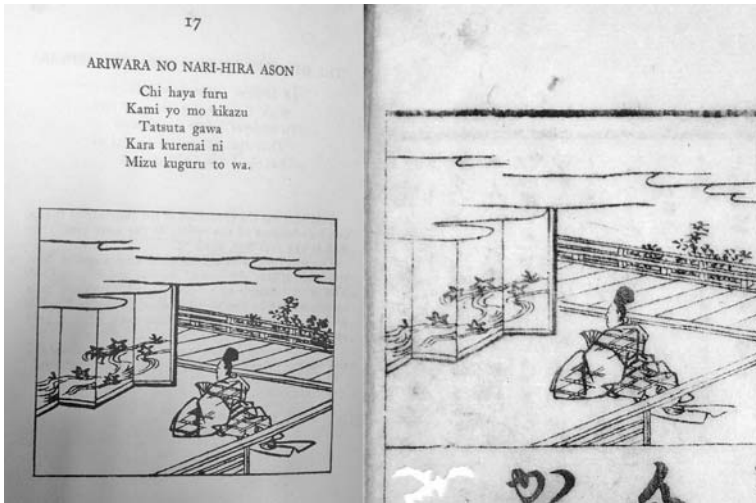


図2 Porter 訳(左)と『千載百人一首倭寿』(右)

3. 日本人によって作られた翻訳

百人一首の英訳の中には、日本人訳者によって作られた英訳も複数ある。表には現在までに取得でき、清濁の確認ができたものを掲載したものである。ただし、野口米次郎も百人一首を訳しているが、英訳のみで、原文を表記していないため、この表から外すことにした。

表2 「ちはやぶる」の原文表記(日本人訳者)

1. 小宮水心	1908	ちはやふる	翻訳が Dickins に影響されているが、本文はおそらく Dickins と関係がない。
2. 吉田龍英		千早ふる (ローマ字表記なし)	英文に Dickins 1909 を用いた。
3. Ken Yasuda ⁵	1948	Chihayafuru	不明
4. Heihachiro Honda	1956 (1947, 1957)	Chihaya furu ちはやふる	Porter 訳について述べているが、参考にしたかどうか不明。
5. 宮田明夫	1981	Chihayaburu ちはやぶる	井上宗雄、木俣修、丸谷才一

6. 武井隆道	1985	ちはやぶる	不明
7. 出井光哉著	1991	ちはやぶる	不明
8. 宮下恵美子、マイケル・ディラン・ウェルチ	2008	Chihayaburu, ちはやふる	不明

日本人の手によって作られた翻訳⁶に目を転じてみると、1981年の、宮田明夫訳までは全て「ちはやふる」で、清音になっている。最初の日本人によって作られた小宮訳は、Mayer氏が指摘しているように⁷、Dickins訳の影響が強くみられる。

Dickins 1866 (b 訳)

In fisher's barque I onward glide
O'er th' broad expanse of ocean's tide,
And towards th' horizon when I turn
My glance I scarcely can discern
Where the white-tipped billows end,
That with the cloud-horizon blend.

Komiya 1908

I glide over the broad expanse of ocean and
toward the horizon. When I turn my glance
I can
scarcely discern white-tipped billows with
the
cloud-horizon blend.

それぞれの訳に使われている言葉を見てみると、小宮の29語の中で、27語はDickins訳と一致していることがわかる。ただし、Dickinsに影響されているにもかかわらず、原文は清音になっている。Mayer氏の指摘によると、小宮訳の第1目的は翻訳を作ることではなかった。ただ、百人一首の解釈本に英訳を追加しただけで、訳自体がDickinsに影響されていても、原文の出典は別ものだったと考えられるが、その出典は不明である。

その次の吉田、安田と本田訳は出典が不明である。本田はPorterについて述べているが、日本人の翻訳者が歌の引用に外国人翻訳者のものを参考にするというのは考えにくいことであり、影響があったとしても、それは翻訳への影響にすぎないと考える。

武井訳の出典も不明であるが、宮田は井上宗雄、木俣修、丸谷才一などの所説を参考にしたと述べている。具体的な参考文献が記されていないが、三人とも百人一首についての本を出版している。井上宗雄の1967年および1975年の本にも「ちはやぶ

る」が濁音になっている。同じく、木俣修の1956年の本にも、丸谷才一の1979年の本にも「ちはやぶる」と、濁音で書かれており、どの著者の本を参考にしても濁音になる。

4. 「ちはやぶる」の清濁変遷

万葉時代は「ちはやぶる」は漢字が統一されておらず、濁音で読む漢字も、清音で読む漢字も使われており、清音と濁音が併存していた。万葉集においては、用例が16例あり、その表記は千磐破(7例)、千石破(1例)、千葉破(1例)、千早振(1例)、千羽八振(1例)、千速振(1例)、血速旧(1例)、知波夜夫流(2例)、知波夜布留(1例)である。この中で清音とされているのは「布」である。

吉海氏によれば⁸、平安時代以降、次第に清音に傾き、室町時代の「日甫辞書」では「チワヤフル」と清音で記されている。現代の辞書をみると、角川の『古語大辞典』では清濁両方が表記されており、中古以降清音化して用いられたと書かれている。小学館の『日本国語大辞典』では濁音で書かれているが、中世・近世では「ちはやふる」、「ちわやふる」とも用いられたという記述があり、同じく小学館の『国語大辞典』では濁音で書かれており、中古以降「ちはやふる」、「ちわやふる」と記されている。また、角川の『歌ことは歌枕大辞典』には古くは「ちはやふる」と清音であったという記述がある。これらによれば、上代の前の時代は清音であり、上代に濁音に変わり、中世・近世にまた清音に戻ったという流れになるので、百人一首が成立した頃、清音だった可能性が高くなる。しかし、江戸時代になると、契沖の『百人一首改観抄』や、賀茂真淵の『冠辞考』では濁音説が唱え始められる。だが、他の江戸時代に流布していた版本類は清音になっている。

国学と無縁だったかるたは、江戸時代にも、明治時代にも清音になっている。家庭用のかかるただけではなく、競技かるたについて初めて出版された、1903年の『百人一首かるた必勝法序』も清音になっている。しかし吉海氏によれば、1904年の競技用標準かるたも清音であるが、1925年の「公定かるた」は濁音になっている。また「公定かるた」の出版社である東京図案印刷から次の年、1926年に出版された『百人一首かるたの話』においても、濁音が正しいと書かれており、その後の競技用かるたも、家庭用かるたもそれに影響されて、濁音になったと考えられている。

外国人訳者の翻訳になると、一般的にまだ清音が主流であるはずの時期に、すでに

濁音になっている。それに影響を与えたのは、前述のように1806年の、衣川長秋の『百人一首峯梯』と、1757年の賀茂真淵の『冠辞考』である。初めて百人一首の英訳を行った Dickins は、「ちはやぶる」を濁音と説明している『百人一首峯梯』を参考にした。次の英訳を行った McCauley が Chamberlain の記事をもとにしているが、Chamberlain も「ちはやぶる」を濁音と説明している『冠辞考』を参考にしており、それが McCauley 訳に影響を与えたといえる。そのあとの訳者は、おそらく Dickins と McCauley 訳の影響を大きく受けたと考えられる。一方で、日本人によってなされた初期の訳の表記は、その時代に主流だった清音表記になっている。しかし、日本語においては1920年代より濁音表記が正しい表記として認識されるようになると、その後日本人による英訳においてもその影響がみられることとなった。こうした変化は表2で明らかにしたように、移行期を経て1980年代より「ちはやぶる」表記で固定化することとなったと考えてよいだろう。

5. 結 論

以上から、「ちはやぶる」の清濁の変遷を S (清音) → D (濁音) → S → D と表すことができる。清音とされた時代も、濁音とされた時代もあったが、清音であった時代が圧倒的に長かったと読み取ることができる。現在、百人一首の在原業平歌で濁音が主流になっていることに大きな影響を与えたのはおそらく万葉集研究と、競技用かるたが濁音になったことであろう。ただし、百人一首の外国人によって作られた英訳、日本人によって作られた英訳、競技用かるた、それぞれ濁音になった時点が異なっている。外国人による英訳は1866年の Dickins 訳から濁音になっている。(例外として Porter 訳のみが清音)。競技用かるたの札は、1925年に、濁音になっている「公定かるた」の登場から濁音になり、家庭用かるたもそれに影響され、濁音になった。日本人訳の表記が一番遅く、1981年に濁音になった。

では、この枕詞の清濁問題をどう解決するべきであろうか。表記をどうするべきであろうか。まず、かるたとしての百人一首からみる場合、「公定かるた」以前のかるたの表記は一貫して清音だった。それが、1925年に「公定かるた」が作成され、突然濁音になった。しかし、濁音にする理由や根拠・利点が示されていないため、かるたの表記を清音に戻すべきだと考える。

文学作品としての百人一首の場合も、以上指摘したように、百人一首が編まれた時

代に清音だった可能性が極めて高い。万葉時代に濁音と清音が併存していたが、「百人一首」の表記として万葉時代の表記ではなく、百人一首が編まれた時代の表記の方が相応しいと考える。そのため、現在一般的となっている百人一首の「ちはやぶる」表記についても、翻訳のローマ字翻字も清音に戻すべきではなかろうか。

注

- 1 吉海直人氏によれば、清音の場合、川を反物に見立てた「括り染め」という屏風絵的イメージになり、濁音の場合、川全体が「錦織り」のイメージとなる（吉海直人『百人一首の新考察』世界思想社、1993年9月 67～68頁）。
- 2 アメリカ人・イギリス人訳者欄の英訳は時代順に以下のようにになっている：Dickins, Frederick Victor, *Hyak Nin Is'shiu, or Stanzas by a Century of Poets, being Japanese Lyrical Odes, Translated into English, with explanatory notes, the text in Japanese and Roman characters, and a full index*. Smith, Elder & Co, London, 1866；Dickins, Frederick Victor, *A Translation of the Japanese Anthology known as Hyakunin Isshiu, or a Hundred Poems by a Hundred Poets*. In: *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. 1909 (pp.357-391.) <http://www.jstor.org/stable/25210742>（接続日時2016年6月6日）；MacCauley, Clay, *Hyakunin Isshu (Single Songs of a Hundred Poets)*. In: *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol.XXVII. Part IV., 1900 <https://archive.org/stream/transactionsasi09japagoog#page/n532/mode/2up>（接続日時2016年6月6日）；MacCauley, Clay, *Hyakunin-Isshu (Single Songs of a Hundred Poets) and Nori no Hatsu-Ne (The Dominant Note of the Law)*. Kelly and Walsh, Ltd., Yokohama, 1917；Porter, William M., *A Hundred verses from Old Japan being a translation of the Hyaku-nin-isshiu*, Clarendon Press, Oxford, 1909；Rexroth, Kenneth, *One Hundred Poems from the Japanese*. New Directions, New York, 1964；Galt, Tom, *The Little Treasury of One Hundred People, One Poem Each*. Princeton University Press, New Jersey, 1982；Levy, Howard Seymour, *Japan's best loved poetry classic, Hyakunin Isshu*. (East Asian poetry in translation series, v.1). Warm-Soft Village Publications, 1984；Carter, Steven, *One Hundred Poems by One Hundred Poets*. In: *Traditional Japanese Poetry: An Anthology*. Stanford University Press, 1991. (pp.203-238)；Mostow, Joshua S., *Pictures of the Heart*

- The Hyakunin Isshu in Word and Image*. University of Hawai'i Press, Honolulu, 1996 ; McMillan, Peter, *A Translation of the Ogura Hyakunin Isshu—One Hundred Poets, One Poem Each*. Columbia University Press, New York 2008
- 3 日本詩における枕詞と掛詞の活用
 - 4 吉海直人、「千載百人一首倭寿」の翻刻と解題 in 同志社女子大学日本語日本文学第九号、79～112 頁、1997 年
 - 5 日本人とアメリカ人のハーフであるが、日本語を母国語としているため、アメリカ人・イギリス人翻訳者の欄ではなく、日本人翻訳者の欄に入れることにした。
 - 6 日本人訳者蘭の英訳は時代順に次のようである : Komiya, Suishin 小宮水心『百人一首 : 欧文訳・小品文訳・五言絶句訳』石塚書舗、1908 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/874031> (接続日時 2016 年 6 月 6 日) ; 吉田龍英『百人一首解説』青梧堂 1941 ; Yasuda, Ken 安田健『歌カルタ百人一首 Poem Card』鎌倉文庫 1948 ; Honda, Heihachiro, *One Hundred Poems from One Hundred Poets—Being a Translation of the Ogura Hyaku-nin-issui*. The Hokuseido Press, 1956 ; 宮田明夫『英訳小倉百人一首』大阪教育図書 1981 ; Takei, Takamichi 今野幸一郎著、武井隆道英訳『④ものぐさ 小倉百人一首』右文書院 1985 ; 出井光哉著『プラス英訳百人一首』風塵社 1991 Miyashita, Emiko ; Welch, Michael Dylan, *100 Poets : Passions of the Imperial Court*. PIE Books, Tokyo, 2008
 - 7 MAYER, Ingrid Helga『百人一首』の英独語版を通して見る和歌の翻訳、博士論文、北海道大学、2016 年 3 月 24 日、18 頁
 - 8 以下の吉海氏の説は、大学院紀要本号所収のものである。

